

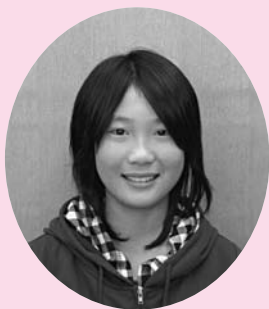
人権作品

市長賞

市では、市民の皆さんの人権問題に対する関心を深め、人権意識の高揚を図ることを目的として人権作品（作文・ポスター・標語）を募集し、総応募点数16489点の中から、市長賞・優秀賞・入選作品を決定しました。ここでは、市長賞を受賞された皆さんの作品を紹介します。

ポスター

◆小学生の部◆



依那古小学校6年
米森 睦 さん



◆中学生の部◆



桃青中学校3年
木根 真璃 さん



標語

◆小学生の部◆

言うまえに

考えてみよう

自分の言葉

丸柱小学校6年

川村真由さん



◆中学生の部◆

変わろうよ

見ているだけの

自分から

島ヶ原中学校2年

桂口茜さん



◆一般の部◆

知っている

さしのべた手の

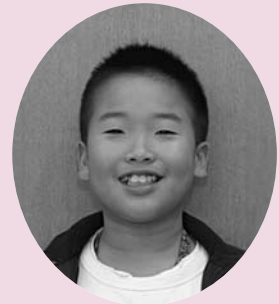
あたたかさ。

阿山ハイツ

平木やす子さん



◆小学生の部◆



河合小学校6年
石出 稜 さん

「今までの経験」

ぼくは、2年生からベルテスという足の病気で急に入院することになりました。大好きなサッカーもできなくなりました。ちょうど、スポーツ少年団のサッカーに入るかどうか迷っていた頃でした。学校で一緒にサッカーをしていた仲多朗君が「ぼく、稜君の分もがんばるから。」と声をかけてくれましたがサッカーができなくなることがよくやしかったです。

長い期間の入院なので、学校も変わることに、親とも離れ離れに生活することになりました。当時2年生の頃は、泣いてばかりでした。『なんで離れ離れにならなあかんの?』という気持ちでいっぱいでした。

入院生活は、金曜日には病院から家に帰って、日曜日にまた病院に行くという繰り返しでした。病院に行くとお医者さんが「おかえり。」と言いました。ぼくは、その言葉が嫌いでした。なぜかというと、『ぼくはこの病院の子じゃない。』という思いが強かったからです。

この学校は、しょうがいをもった小さい子から大人までの人がいました。しゃべることができない人や耳が聞こえない人、心の病気の人が、手足が不自由な人たちがいました。

うまく動かない手ではさみを切っている子がいました。また、ある子は「おーはーよー。」と声をかけてくれるのですが、なんて言っているのかはつきりと聞き取れませんでした。口からはよだれが出ていました。ぼくは、「えっ、何で。」と聞き返すこともできず『つばとか出ていて気持ち悪いなあ。』と心の中で思っていました。

今までに車椅子に乗った子は見たことがあつたけれど、鼻にチューブを入れている子やよだれが出てくる子、何を言っているのかわからない子との出会いはなくて、こわく感じました。

学校で色々な行事をするときも、ぼくは協力しないので、同じ病気の子とだけで仲良くしていました。心の中で『この人やつたらいいかも。』と考えながら行動していました。だから、みんなで一つのことをやりとげることができませんでした。見た目だけで決めつけていた自分がいたからです。こんな自分は、3年生になるまで続いていました。

そんなぼくが、今までの自分を振り返る出来事がありました。それは、3年生の校外学習で三重県人権センターに行つたことです。そのとき観た映画がとても心に残りまし

た。その映画は、何色かのクレヨンの中で誰が王様になるかで戦つていて、最後に赤色が炎でみんなを燃やしてしまうというものでした。お互いを認め合えないと全てなくしてしまふという映画でした。それが自分と重なりました。どきっとしました。

少しづつだけれど、行動に移そうと思いました。今までは、車椅子同士で話をするときも距離をおいていたけれど、自分から話しかけていくようにしました。そうしていくうちに、その子と近くなつた気がして、よだれも気にならなくなつてきました。一文字ずつ声を出すのもとても力がいるのに、しゃべろうとしている姿を見て、何事にも一生懸命に立ち向かつていく強さを感じました。

4年生のとき、河合小学校にもどつてきました。タビジャーンという左足を地面につけなくていいようにする器具をつけていました。今は、何もつけていませんができることとできないことがあります。

ぼくは、自分の足のことをなかなか受けとめることができませんでした。病気になる

いる自分、みんなが動いているようにできない自分がいやでした。

そんなぼくが立ち直れたのは、まわりの子たちのかかわりだと思えます。5年生の運動会のリレーのとき、まだ走ることができないぼくは放送係でした。リレーが終わつてからよつてきて声をかけてくれた友だちがいました。ぼくは、走つてはいなかつたけれど、一緒に走っていた気持ちになりました。

今年の運動会もやれることとやれないことがあります。徒競走やリレーはできるけど、やりたかつた組み立て体操のピラミッドなどはできません。でも、ぼくは、上にいる子のふみ台役で登場します。『みんなががんばっているのと同じ力で自分にできることをやろう。』と心に決めていきます。6年生全員の力で成功させたいと思つて

います。

ぼくは、自分の身に降りかかつてくる事実を受けとめまわりの力を借りて自分にできることはあきらめないでやっています。そんな生き方をしたいと考えています。これはしょうがいを持った人との出会いから学んだことです。

★★★人権作品市長賞★★★

大山田中学校では、年6回全校ヒューマンタイムという人権活動をしている。これは、講師の先生を招き、お話をきかせていただいたあと、全校で思いを出し合い、自分自身を見つめ直し、なかまとのつながりを確かめ、反差別の生き方をみんなでつくっていくというものだ。僕は今までこの活動に参加して、話をきいて、簡単に感想を持つておけばいいかと思っていた。けど、そんな僕をもう一度見つめ直させてくれたのが、松村元樹さんの話だ。松村さんは、

「気づいたら行動にうつさな意味がない。」
と言ってくれた。その時、なぜ心がグツときたような気がした。それは、昔の自分、今の自分と比べ、それをしている

い、できていない自分がいたからだ。学校生活の中で、「ちょっとおかしいな。」と思う事があっても、注意せずに見過ごす事があった。松村さんのメッセージは、そんな僕が、日常の中で行動にうつせば差別をなくす第一歩になるという事だった。保育園から10年以上もつきあっている学年のなかまもたくさんいるのに、自分の気持ちを出せず、行動にもうつさず、まさに人の人権を考える事から逃げていただけだと思っただ。そんな自分と向き合い、なかまと行動にうつしたいと思っ活動しているのが、部落問題を考える中学生の集い生徒実行委員会である。

僕は、大山田中学校の人権サークル「コバト会」の会長をしている。大山田中学校のみ

んなの思いを代表して、他の実行委員の人や他校の生徒に伝えたいと思っ実行委員会に参加した。初めての実行委員会はとても緊張したが、場の雰囲気や和み、いろんな話ができた。しかし2回目の実行委員会では、全然発言する事ができなかつた。機会はたくさんあつたと思う。けど、言えなかつた。

そこで、「部落出身やねん。」の言葉に続けて、自分の思いを言ってくれた実行委員がいた。僕は、その思いをきいて、何つ返せなかつた。頭の中では「一人で悩む事はないし、みんながしつかり受け止めてくれる。そして一緒に考えてくれる。」という事を返そうと思っていた。しかし、言葉にできなかった。僕は、何なのか分からなかつた。

返せなかつたのは、今までも行動にうつせない、言葉だけの自分で終わるような気がしたからだ。松村さんの言った事をする為にも返していきたいと思っ。そこで、僕は、中学校のみんなにきいてもらいたいと思っ。

学校で学年集会を開いてもらつた。僕は、45人のなかまに、こう伝えた。

作文

◆中学生の部◆



大山田中学校3年 東 優也 さん
「今の自分 これからの自分」

「小学校から、部落問題についていろいろ考えてきた。でも、6年生の時に『部落出身だ』ときいた時は、『そんなん気にしやんとし』と返していた。しつかり、相手を見つめ考えているつもりでも、身近な問題として考えていなかつた。でも今は違う。昨年の部落問題を考える中学生の集いのアピール文などでも考えてきたが、今行動にうつせやな意味がないし、行動にうつしていきたくと思っ。でも返せない、モヤモヤしたままで終っている自分がいる。だけど、今、みんな考えていききたい。そして、行動にうつしていきたく」と、話した。みんなでつになつて行動していきたくという事を。うまく伝わつたかは、分からない。みんなが、僕と同じ気持ちになつてくれたかも分からない。けど、伝える事に意味があり、一番はみんなで行動していきたくという思いを正直に話せて良かった。それに、この学年集会を開いて緊張と不安だらけだった僕が、みんなに伝えたいと思っ、先生たちが、時間をつくってくれた。そして、みんなに伝える事ができた。まさに、松村さんの、「気づいたら行動にうつさな意味がない。それ

をしないと差別はなくなるならいい。」というメッセージにこたえる事ができた。そして、自分がまた二つ成長できた。

そして、学年集会の後に、4つのグループに分かれて話したのが、2、3人の子が、

「今までは、正直何にも考えず、他人事で終わらせていたけど、これからは、しつかり考えたい。」

と言ってくれた。僕の話をきいて、こう返してくれた。僕は、反差別のなかまが増え、行動にうつしていくスタートラインに立つたと思っ。

僕の、人権活動に対する、中途半端な思いや考え。他人事として身近な問題ではないとして考えていた部落差別。何の根拠も理由もない差別をなくすために、考えていこう。しつかりと闘い取り組んでいこうと思っ始まつた新たな活動。一つになり信じ合えば必ずなくなる。昔の自分みたいに、言葉で返して終わらず、行動で伊賀に住む人々が輝けるように、自分自身も見つめて、頑張っていきたく。

- 上野図書館 ☎ 21-6868
- いがまち公民館図書室 (いがまち公民館内) ☎ 45-9122
- 島ヶ原公民館図書室 (島ヶ原会館内) ☎ 59-2291
- 阿山公民館図書室 (あやま文化センター内) ☎ 43-0154
- 大山田公民館図書室 (大山田教育センター内) ☎ 47-1175
- 青山公民館図書室 (青山公民館内) ☎ 52-1110

図書館だより

Library Information

★新着図書紹介 (上野図書館)

■一般書

『脳を活かす仕事術』(茂木 健一郎/著)

脳科学者として著名な筆者が、頭で考えたことを実践するための58の仕事術を紹介してくれます。「脳の情報整理術」「身体を使って脳を動かす」「楽観主義のすすめ」など、仕事だけではなく、日常の生活にも役立つヒントが見つかるかもしれません。

■児童書

『おいしいなぞなぞ』(片山 令子/作、久本 直子/絵)

今日はくまのハニーちゃんの誕生日。3人の友だちがプレゼントをもってやってきて、「おいしいなぞなぞあててごらん」と言いました。「どなかたちにもなれる、ちゃいろいおばけ」って何かな? なぞなぞを解いてプレゼントの中身を当ててみましょう。

■一般書『ブラジルのかわいいデザインたち』

(植嶋 秀文、井岡 美保/著)

日本の反対側にある遠い国ブラジル。この国のことをよく知っているという人は、まだまだ少ないのではないのでしょうか。この本では、食品、日用品、音楽、建築など、ブラジルデザインの魅力をたっぷり紹介しています。ブラジルに興味を持つきっかけになれば、という著者の思いが込められた1冊です。

■児童書

『みんなをビックリさせる! かんたん手品がいっぱい!』

(カルチャーランド/著)

この本では、身近な道具で簡単にできる手品をたくさん紹介しています。「消えるコイン」「トランプの透視」など、友だちをビックリさせるような手品を覚えてみませんか。写真とイラストでわかりやすく解説されています。

| 12月の読み聞かせ | | | |
|-----------|-------------------|----------------|----------------------------------|
| 開催日 | 会場 | 時間 | 催物 |
| 3日(水) | ふるさと会館いが小ホール | 午前10時～1時間程度 | 絵本の時間 |
| 13日(土) | 上野図書館 2階視聴覚室 | 午後2時～30分程度 | おはなしの会 小さい子むき |
| 16日(火) | 阿山公民館図書室 読み聞かせ室 | 午前10時30分～30分程度 | 読み聞かせ会 *読み手 読み聞かせボランティア「はあと&はあと」 |
| 17日(水) | 上野図書館 2階視聴覚室 | 午後3時～30分程度 | えほんの森 *読み手 おはなしボランティアグループ「よもよも」 |
| 20日(土) | 上野図書館 2階視聴覚室 | 午後2時～30分程度 | おはなしの会 大きい子むき |
| 20日(土) | 大山田公民館図書室 おはなしの部屋 | 午前10時30分～20分程度 | おはなしたいむ *読み手 おはなしボランティア「きらきら」 |
| 21日(日) | 阿山公民館図書室 読み聞かせ室 | 午前10時30分～30分程度 | 読み聞かせ会 *読み手 読み聞かせボランティア「はあと&はあと」 |
| 24日(水) | 青山公民館図書室 絵本のコーナー | 午前10時30分～30分程度 | 大きな絵本の読み聞かせ会 |

★絵本の読み聞かせや紙芝居、手遊びなどをします。



第9回みえ人権フォーラム ～世界人権宣言60周年記念～

【とき】 12月21日(日)
午前9時30分～午後4時

【ところ】 三重県人権センター (津市一身田大古曾)

【内容】

- ▼午前10時～11時30分
記念講演「私たちはみんな必要とされているのです」
国連ボランティア終身名誉大使 中田武仁さん
- ▼午後0時30分～1時30分
親子ふれあいコンサート 小町正さん
- ▼午後1時40分～2時20分
韓国農楽演奏 塩浜子ども農楽隊、四日市朝鮮初・中級学校の子どもたち

- ▼午後2時30分～3時30分
太鼓集団「怒」公演
- 食文化コーナー
珍しくておいしい食べ物が食べられる (有料)
- 親子体験コーナー
無料で楽しくものづくりが体験できる
- アピールコーナー、展示コーナー

※入場無料

【問い合わせ】

三重県人権フォーラム実行委員会
☎059-233-5525